

2011年4月3日 田澤 勇夫

3月11日に東日本大震災が起きてしまった。当日、私は弊社の那須工房を昼頃に発ち15時少し前に浦和の自宅マンションのエレベータを降りた直後であった。この災害はこれからの日本の将来に大きな影響を与えたいと思ひ、私自身が役に立てることを探す必要性を感じ、今直ぐにでも悲惨な災害の現状を自分の目で確認したいと思った。しかしながら、拙速な行動は意味がないどころか問題を起こすと考え、状況を見守ることにした。

3月12日に東電福島原発が水素爆発を起こし尋常でない状況になったので、当面のスケジュールを全てキャンセルした。最悪の場合、埼玉からも避難する必要があるので、その準備をしながら福島原発事故の情報を注視し、不安な日々を送っていたところ、3月25日、I社福島工場のE副工場長から電話連絡があった。I社福島工場とは福島原発より約10km離れた楢葉町にあり、私とEさんは20年来の付き合いであるが、震災後、連絡が取れなかったもので、従業員の人達と工場がどのようになったか気になっていたところだ。Eさんの話によると、地震と津波の被害は非常に少なく原発事故の問題がなければ直ぐにでも業務再開は可能だが、今はいわき市勿来の協力会社A社に避難しているとのこと。20名ほどの従業員で業務再開に努力しており、みな元気であると聞いて安堵した。しかし、このような状況にも拘らず、発注元によっては納品が滞っているため、「俺の会社を潰すきか！工場に取り行くなどして、何とかしろ！」と叱り付ける取引先も出ている様子。また、ガソリンもなく移動にも困っているとのことなので、私は「弊社の那須工房に地震被害を確認するために那須に行きます。そこからは勿来は近いので陣中見舞いに行くことを考えています」と言ってしまった。Eさんも、「大変だからいいですよ」なんて言わないで「そうですか、悪いですね」と言うので、口から出た言葉を訂正する余地はなくなり、いつ実行するかの問題となってしまった。

その後、TVとインターネットにかじりつき、新聞を熟読しながら、原発事故の状況を詳細に調べた結果、3月27日の週は恐らく小康状態が続き、水蒸気爆発などと言う最悪状況が起こる可能性は低いと判断して、3月27日に那須行きを決行。妻には、実家の新潟に避難していても良いよと言ったのだが、生きるのも死ぬのも一緒と言うことで、共に行動することになった。

3月27日11時頃に浦和を発ち、3月11日以来、久し振りに東北道にのった。車の量はやはり少ない。物資を運ぶトラックが多いかと思っていたが、私たちのようなマイカーが多い。周りの車を良く見ると車内いっぱいの物資を運んでいる車が多い。どの車も慎重運転に心がけている。「被災地に救援に駆けつけるのに、途中で事故でも起こしたらたまらないからみんな慎重になっているね」と妻と話していたら、前方、追い越し車線に車が止まっている。若い男女が車の周りに立っている。車を良く見るとちょうど真中が折れ曲がっている。こんな非常時でも慎重な行動が出来ない馬鹿がいるものだ。

黒磯ICまでの路面状況はいたって良好で地震の影響はほとんど感じなかった。黒磯ICを降りて那須別宅に14時頃に到着。まずは、別宅に置いてある軽の中古バンのチェック。

2011年4月3日 田澤 勇夫

ガソリンは抜かれていない。那須地区でもガソリンが抜かれた車が何台もあったそうで、被害にあっていないのは別宅近くの知合いの永住者が見回りに来ていたお陰だろう。早速、妻にお礼の挨拶に行ってもらおう。

恐る恐る家の中に入って家の中に入り周りを見渡すと、何も変わったことがない？ 良く見ると本棚の上(本棚の中ではない)に置いていた文庫が数冊落ちていただけであった。

次に那須工房を見に行った。私は安全管理、危機管理意識が希薄なので、例えば、次の那須入りの時には直ぐに実験に取り掛かれるよう土壌試験用の実験器具(ガラス製)を棚に出しっぱなしにしていたが、これも何ともなかった。また、自分で造った建屋がみっともなく歪んでいることも覚悟していたのだが、これも何ともなかった。唯一、棚に立掛けていた軽いファイルが1冊、床に落ちていただけであった。地元の話では、地下1m以下は火山岩からなる砂利層で、これが振動吸収の役目を果たしたらしい。私も工房建屋を造る際、金属パイプからなる基礎杭を2m位、打ち込むのに大変苦労したことを思い出した。

3月28,29日は急いでたまっていた仕事を片付け、3月30日の朝9時過ぎに那須を発ち、勿来に向かった。車ナビのルート選定では白河経由で国道289号線を通って所要時間が3時間以上かかるので、福島県境近くの棚倉町までは山道の最短ルートを走ることにした。道は狭くカーブが多いので慎重に運転すると、40分位で棚倉町に着き国道289号線に合流した。

この国道は田舎道の割に幅が広く運転し易いが、先に進むほど走っている車の数が少なくなっていく。

福島県に入ると道路の状態は更に良くなってきたが、走っている車は更に少なく、ほとんど見受けられなくなった。漸く前方に走っている車がある。トラックと自衛隊の災害救援用ジープである。ジープは左折して去っていった。何処の現場に行くのだろう。助手席の妻は昨晚、緊張のためよく寝れなかったようで、眠そうだ。周りのはのどかな田舎風景、立派な道路。しかし、人も車もほとんど見かけられない。非常に不気味だ。この時は一人で来なくて良かったと本当に思った。早く勿来に着いて、そして、早く浦和に戻りたいと思いながら運転していると2時間で勿来に着いてしまった。



災害救援用ジープ

途中は不気味なほど人も車も非常に少なかったが、勿来に入った途端、人も車も多いのには驚いた。近くのコンビニに入って様子を見ると、商品は那須のコンビニにより多い。皆さんの顔も暗くない？ 寧ろ、さいたまの人達の顔の方が暗く、いらいらしていたような気が

する？ 開いているGSもある。拍子抜けした気持ちでコンビニを出て5分位でA社に到着した。

そこで面会を申し出ると、I社の事務の女性と男性が出てきて「残念ながら、Eたち20名は福島工場に行きました」と告げられた。私は「え～！」である。あの立ち入り禁止区域に行った！？話を詳しく聞くと、避難されている檜葉町の町長をお願いして、緊急車両と言うことで特別許可を貰い、立ち入り禁止区域の出入りの際には放射能検査を受けているとのこと。そこまでして仕事に頑張っているのかと感心させられた。福島原発状況が小康状態にあると思われるこの1週間に工場にある設備と部材を出来る限り運び出す予定とのこと。



A社の正門

因みに、私の知り合いの方の甥が東京電力いわき地区に勤めており、地震後、会社から逃げるようにとの指示があり、那須に避難している。今後の勤務地は品川だそう。いわきから逃げられない人、逃げてはいけないと思って懸命に頑張っている人達が多くいるというのに。なんということだ！

Eさんたちの帰りは何時になるか分からないと言われたので、持参した飲み物と食料を渡して浦和に戻ることにした。携帯タンクに入れたガソリンは不要とのことを持ち帰ることにした。Eさんたちのようにいわきで頑張っている人達には申し訳ないと思ったが、正直なところ一刻も早く浦和に戻りたかった。

勿来ICから磐越道に入り、一路、浦和ICを目指した。東北道と違い磐越道の路面状況は非常に悪い。部分的に隆起しているところが数多くあり、車は何度もバウンドするので運転には要注意である。途中、渋滞があり、一旦、下道に降りて次のICで再び高速に入った結果、15時頃に自宅に着くことが出来た。気になっていた那須工房とI社の件が一応、片付き、ほっとしていた時にEさんからお礼の電話があった。福島工場から戻って来た皆で私達が届けたカステラをあっという間に平らげたとのこと。

ここからはまとめ、辛口な話になります。今の日本は最悪のタイタニック号のようだ。「この船は沈まない、安全だ」と豪語する船主と船長たち。過信と油断。そして船は冰山に突入。ここまでは普通のタイタニック号。違うのはこれから。驚いた船長や1級航海士などは乗客を置いてさっさと救命ボートに乗って逃げてしまった。驚いた乗客はパニックに。飛語流言が飛び交う。頑張っているのは船底の機関士のみ。

東電の馬鹿野郎と至る所で聞こえる。私たち夫婦も同じことを何度、言っただろう。しかし、冷静に考えると、東電の様はまさに今の日本の典型。そう、典型でしかない。日本

2011年4月3日 田澤 勇夫

のいたるところで同じような現象が進行している。今の日本は江戸時代と違って、民主国家である。「幕府が悪い！倒幕だ！」なんて一握りの悪者を祭り上げて、単純に考えられる時代ではない。

Eさんは「TVを見ていると、埼玉などの首都圏で水やガソリンなどを買占めに走っているようだけれど、何やっているんだ!？」といつもの元気な声で言っていた。また、「昨年、取れた米も放射能汚染されて、福島のは食べねえよ」と言われ、風評被害が広がっていると嘆いていた。そして、「何が何でも直ぐに納品しろと怒鳴っていた取引先に、工場に取りに行ってきたので送りますと告げたところ、放射能汚染が怖いのでそちらに置いておいて言われましたよ」と情けなさそうである。

また、計画停電で電車の運休が続いていた時、1軒当たり100Wを節電すると首都圏の電車の電気は賄えますとの訴えにも拘らず、私が知っている或るマンションで廊下の電球の間引きを或る住民が理事長に提案したが、理事長曰く、「廊下で躓くかもしれない、鍵穴が見難い、他の住民から苦情が出るかもしれない、責任が取れない、夜の節電は必要がなし、間引いてもたかが知れている」など、いろいろな理由を並べて却下。

今、必要なことは、国全体を上げて嫌なことを先送りしてきたことを止めて、国民一人一人が本気にこの国の将来のために尽力する必要がある。もはや、我々に、今までのように誤魔化して、見ない振り、聞かない振りをしている逃げ道は残されていない。